

## 柏瀬祐之著 『ヒト、山に登る』

ニタニタ、イヒイヒ、笑えてしまった。抱腹絶倒。同じ著者の後著『午後三時の山』も登山に係わるモロモロを、機転の利いたエスプリと上質なジョーク、ややシモネタではあるがホンワカとした艶笑噺などのオブラートに包んだ絶品で笑えたが、こちらはエッセーなどが主であったのに比べて、ここに紹介する一品は山に関するマジメな論考を軽妙洒脱な筆致で描き出して笑わせる。「山」と言っても、所謂「登山論」などの屁理屈ではなく、「ヒトは何故“高み”に登りたがるのか」という人間の不思議に焦点を当てたものである。

「はじめに」に曰く、「・・・広く人間の生い立ち、行動、感覚、文化、自然との関係を通して、<登山から見た人間>あるいは<人間から見た登山>を訪ねて、一般によく論議されている登山の陽のあたる部分ではなく、あえて地下に深く埋もれた根っこの部分である“人間とやらの素性”をまさぐってみようと、無知、短見、強弁のとりどりを承知の上でけっこう楽しく風呂敷を広げさせてもらった・・・」（筆者要約）。

このようなワケであるから、内容も、ヨーロッパの近代化の幕開けはフランス革命や産業革命などではなく、それまでは悪魔の住処と恐れられていたモンブランの初登頂にこそその嚆矢が求められるという新説を、自然主義志向派の巨頭ルソーやソシュール、現象学のフッサール、はては本邦の筒井康隆「文学部唯野教授」まで、記号論や構造主義やポストモダニズムを引っ張り出して、そのウンチクを傾け、続く章では、人類進化の通説、奇説を遊覧しつつ“立つ”から“登る”への生物学的な進化とその心理、さらには、人間の最もプリミティブな感覚である触覚とその環境である実在空間を論じて、現代人が持っている虚在感嗜好、水平志向、脱重力志向の危うさを、登山、人間、自然をバックに指摘している。

論じている内容は堅苦しいが、それを寝転んでイヒイヒ、ワクワクと読ませる著者は、ナリワイは会社役員ではあるが、これはタダモノではない。20年ほど前に単行本で出版された折にはあまり売れなかったと謙遜しているが、それから10年後に新書版で再刊されたのも頷ける。“知性と教養”を旗ジルシとする我々の山岳会員にはうってつけではなからうか。

白水Uブックス 1999年刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)